

# フジコナカイガラムシに対する薬剤の殺虫効果

果樹試験場 かき・もも研究所

## 研究のねらい

フジコナカイガラムシは、近年カキで発生が多くなり、果実の着色不良やすす病を併発して問題となっています（図1）。本種に対する薬剤の防除効果は、これまで圃場試験でのみ判定され、薬剤の正確な殺虫効果や薬剤感受性の齢期の進行に伴う変動などがよくわかっていませんでした。そこで、それらを正確かつ簡便に把握するために、虫体・葉片散布法による検定法を開発しました。

## 研究の成果

- ①プラスチック容器（内径80mm、高さ25mm）に0.5%寒天ゲルを注入し、インゲンマメの初生葉片を置き、1齢幼虫を放飼します。容器は23℃、日長16L-8D条件で保持します。
- ②放飼2日後に回転式薬剤散布塔を用いて圧力0.2Kg/cm<sup>2</sup>で所定濃度の薬液6mlを散布します。散布5日後に生死を判定します。
- ③トクチオン水和剤やモスピラン水溶剤などフジコナカイガラムシに登録のある薬剤の殺虫効果は高いことがわかりましたが、合成ピレスロイド剤であるアグロスリン水和剤とマブリック水和剤での死亡率は、2齢幼虫では9.5%と6.0%と極めて低く、効果が認められませんでした（表1）。
- ④オルトラン水和剤とトクチオン水和剤、スプラサイド水和剤のLC50値は齢期の進行とともに上昇し、齢期の進行とともに薬剤が効きにくくなりました。一方、モスピラン水溶剤に対する感受性は2齢～成虫ではあまり変化がみられませんでした（図2）。

## 成果の活用面・留意点

- ①カキのフジコナカイガラムシに対して登録のある薬剤は1～2齢幼虫に対して防除効果が高いことがわかりましたので、薬剤防除では1～2齢期に十分な薬量で丁寧に散布することが重要です。



図1 フジコナカイガラムシ

表1 幼虫に対する薬剤の殺虫効果

薬剤名	死亡率 (%)	
	1 齢幼虫	2 齢幼虫
トクチオン水和剤	100.0	100.0
スプラサイド水和剤	100.0	100.0
オリオン水和剤	100.0	100.0
モスピラン水溶剤	100.0	100.0
スミチオン水和剤	100.0	99.2
スターカル/アルパリン顆粒水溶剤	100.0	98.3
* オルトラン水和剤	100.0	85.1
* アグロスリン水和剤	49.9	9.5
* アブリック水和剤	79.6	6.0

希釈倍数：2,000倍

\* カキの他害虫で登録があるが、フジコナカイガラムシではない薬剤

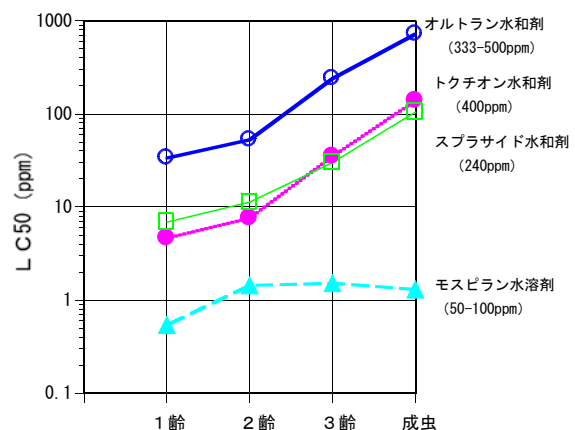


図2 各发育段階のフジコナカイガラムシの4薬剤に対する感受性。図右の濃度はカキにおける登録条件を示す。

(問い合わせ先：0736-73-2274)

